

英語教育における「構造」から「認知」への変遷 その理論と実践の四半世紀

著者	大塚 賀弘
雑誌名	dialogos
号	5
ページ	49-60
発行年	2005-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00005007/



英語教育における「構造」から「認知」への変遷 —その理論と実践の四半世紀—

大塚 賀弘

1. Oral Approachの誕生と発展：

外国語としての英語の教授法は、植民地の人々への英語の定着を図ろうとする「言語政策」上のものであっても、その目的とするところは現地の人々との意志の伝達、即ち、コミュニケーションである。そのコミュニケーションで、アメリカ国民に焦眉の急を感じさせたのが第二次世界大戦であった。ドイツと戦うヨーロッパ戦線で、アメリカ軍とイギリス軍の間に作戦上の齟齬が生じたのである。更に、アメリカ国内では、兵器や軍需物資製造の生産力を上げようとしても、英語が話せないアメリカ人労働者がおり、生産力が上がらなかった。第一の問題点は、英米語の対照研究を急ぎ、その成果を軍へ取り入れ、アメリカからヨーロッパへ飛ぶ飛行機の搭乗職員に「英米語ハンドブック」の携帯を求めることで克服が図られた。この経験から、テクニカル・コミュニケーションの研究が萌芽し、戦後の1953年に学会（Society for Technical Communication）が設立された。

第二の問題は深刻であった。戦時体制になれば国内外でのコミュニケーションに何が必要になるかは既に予見されていたので、太平洋戦争が勃発する1941年（昭和16年）には、アメリカ連邦教育局はミシガン大学（The University of Michigan）に英語教育研究所（The English Language Institute）を設置し、Hispanicの教育対策として「第2言語としての英語の教育」（Teaching English as a Second Language）の効果的方法の研究を委託していた。戦争勃発と同時に研究所の所長に就任したのが、1922年に同大学からPh.D.を取得し、1928年から文理学部（College of Literature, Science and Arts）の英

語教授に就任していた Charles Carpenter Fries (1887-1967) であった。

Friesは外国語教授法の理論を構造言語学に求め、対立 (contrast) の概念を導入した。これは外国語教育の教材編集には特に重要であった。アメリカ構造言語学の始祖とされる Leonard Bloomfield の *Language* は既に 1933 年に出版されていたし、Fries 自身の著となる *American English Grammar* や *Language Study in American Education* も前年の 1940 年に出版されていた。

教材編集の仕事は、単に目標外国語の構造の理解だけでなく、学習者の母国語がどのように影響するかを確かめた後でなければならないとし、このために目標外国語と母国語の比較研究が必要であると Fries は考えた。更に、ことばは場面 (context or situation) と密接に結びついているので、新教材の導入は教師と生徒の問答 (teacher-pupil questions and answers) によって行われ、文型練習 (pattern practice) がこれに柔軟性を与え、生徒と生徒の対話 (pupil-pupil dialog) で完結するというのが Fries の考え方であった。この考え方に基づく教授法は Oral Approach として 1945 年に発行された *Teaching and Learning English as a Foreign Language* (University of Michigan Press) の中で紹介された。その後 Fries は *The Structure of English* (Harcourt, Brace and Co., 1953) を著し、日本の英語教育のために、Agnes 夫人との共著で *Foundations for English Teaching* (Kenkyuusha, Ltd., 1961) を発行している。これ以外にも、*Language, Language Learning, College English, ELEC Publication, The Teaching of Modern Languages* などの学術誌を通して多くの論文や研究報告、啓蒙記事等を発表し Oral Approach の普及に努めた。

この Oral Approach は、Nelson Brooks の行動の科学からの Audio-lingual Approach という名称の提案や、William Moulton の教義の裏づけ、J.B. Watson の行動主義心理学からの支持、Robert Lado, Freeman Twaddell, などの実践のほか、多くのアメリカ構造言語学者達の支持を得て世界の英語教育を席捲していった。

2. Oral Approachは何故に衰微したか？

Prator (1976) は This audio-lingual approach …… enjoyed almost uncontested supremacy in the United States, and I believe also in many other parts of the world, through two decades of the 1950s and the 1960s. But no more. と述べ、20年間の比類なき優位も、1976年の時点では既に衰微したか、衰微しつつあると述べている。

そして、Prator に、In the memory of veteran teachers it is probably the time when there is least agreement as to what method should be preferred. と言わしめるほどに、当時の外国語としての英語教育界は混乱していた。

確かに1977年の University of Hawaii での2ヶ月に亘る Linguistic Society of America の Summer Institute と Annual Meeting における教授法の新しい動向への関心は大変なものであった。James Ney と Leon Jakobovits の論争は、Jakobovits が A Reply to Ney. という論文を発表しただけでなく、Ney への反撃的論文（草稿）を学会参加者に配ったことによって再燃していた。The Modern Language Journal に両者の論文が載るということでも参加者の関心は高かった。Audio-lingual 派の Jakobovits は、認知的な Chomsky の考え方を認めつつも、尚、行動主義心理学からの stimulus-response に基づく habit-formation（習慣形成）としての pattern practice（文型練習）の長所を併せて主張したところに、Ney の指摘を受ける甘さがあったことは皆が理解していた。教授法上において、どちらの考え方が優位に立つかは、将に、追うものと追われるものの優劣の典型であった。そのような中で、Cliford H. Prator の In Search of A Method (1976) は冷静な洞察の下に書かれており、英仏のバイリンガルである彼の豊かな教授経験と研究が語学教師たちの進むべき方向を示した点で注目を浴びていたのは当然であった。

Oral Approach への貢献が特に大きかったのは William Moulton であるが、彼は1914年生まれで、第2次大戦当時は Princeton University の若き研究者であった。大戦中の集中的な外国語教育計画や、国防教育法 (National Defense

Education) による外国語教育計画に参画していた。そのような中から得た成果を有名な 'Five Slogans of the Day' として発表したのが、これが構造言語学を基盤とする Oral Approach の屋台骨となったのである。しかし Chomsky (1965) 以降は、この「屋台骨」すべてが Chomsky 派の考え方とは異なるものとなってしまった。Chomsky 派から、論争の対象とされる Moulton の 5 項目は：

- 1) Language is speech, not writing.
- 2) A language is a set of habits.
- 3) Teach the language, not about the language.
- 4) A language is what native speakers say, not what someone thinks they ought to say.
- 5) Languages are different.

であるが、1) については、「書き言葉」の存在を無視していることが指摘され、2) では、「人間は言語を文法的に組み立てる能力を生得的に (innate) に持っている」とする生成文法支持者の大反対を受け、3) では言語の背景的知識を教えないことの問題点が問われ、4) と 5) では linguistic competence と universality の二点から批判を受けた。しかし、論争が一気に決着するほど言語教育の問題は単純ではない。

Hauptman (1971) は「知能の低い学生は、構造中心の指導でも、situation 中心の指導でも差がないが、知能の高い学生は、situation 中心の学習の方がよいと結論づけ、situation 中心の場合は文法上の難易をあまり問題にする必要はないと主張した。

Stevick (1974) にいたっては、人間性の問題にあまり注意をはらわない reflective な方法 (pattern practice を指している) は問題であるとして、Oral Approach を批判している。彼の主張する 'Language instruction must do an about-face.' (*The modern Language Journal*, 1977) とは、audiolingualists のように、そして Jakobovits (1970) のように、学習者の話す「内容」を言

語的側面から分析したのでは不十分で、その内容が「どこから」、「いつ」、「なぜ」出てくるかを教師は考えるような、より humanistic で、receptive な方法で行われた分析の方が永続的な価値があると主張しているのである。Stevick (1974) が支持しているのは Community Language Learning の Richard Curran, The Silent Way の Caleb Gattegno, Suggestopedia の Georgi Lozanov の 3 人で、'Three Bandwagons' in the language teaching profession と賞賛している。

Oral Approach が Cognitive-code Learning Theory (認知学習理論) に対して弱点とも言えるところを付加すれば、pattern practice によって授与される文型や語が communication 全体から見ると discrete なものになっている点であろう。Monotonous だと言われている pattern practice に割く時間を極力少なくして、より functional で、より communicative な練習を増やす工夫が必要なのである。

3. 変形生成文法は外国語教授法に何をもたらしたか？

Owen Thomas の *Transformational Grammar and the Teacher of English* (1965, Holt Rinehart) に於ける説明も説得力がなく、長続きはしなかった。I.A. Richards や Robert Lado などによる変形文法批判があり、教授法面では変形文法も大きな成果を上げ得なかったと考えるべきであろう。Prator (1976) 論文は教授法の分野での空白を如何に埋めるかが論点となっているが、教授法は総合科学的な分野であり、変形生成文法独自の教授法上の成果を Prator が評価していないのは当然の帰結と言うべきであろう。

Prator (1976) は 10 のスローガンを挙げて、次のように提案をしている：

- (1) Teaching is more of an art than a science.
- (2) No methodologist has the whole answer.
- (3) Try to avoid the pendulum syndrome.
- (4) Place a high value on practical experimentation without doctrinaire allegiance.

- (5) Look to various relevant disciplines for insights.
- (6) View objectives as an overriding consideration.
- (7) Regard all tested techniques as resources.
- (8) Attach as much importance to what your students say as to how they say it.
- (9) Let your greatest concern be the needs and motivation of your students.
- (10) Remember that what is new is not necessarily better.

このスローガンが発表されるまでには、多くの混乱があったことは、先に述べたが、Ney (1974) と Jakobovits (1974) の論争、更にはNeyの味方をした Postovsky (1975) などがあり、それを乗り越えて新しい「認知」と「機能」の方向が見えて来るのが1976年頃ということになる。この動向は認知心理学がイギリスの John R. Firth や M.A.K. Halliday などの Functional Linguistics と合流した結果得られた教授法理論の成果であろう。

4. 新しい動向

James Asher (1966, 1969, 1974) は命令を聞いて体を動かしながら表現を記憶して行く方法を提唱したが、必ずしも新しいものではなかった。心理学者の間では前から常識となっていたことであり、教育面で具体的な工夫をし、実験データを発表したことだけが、彼の努力への評価となったと見るべきである。なぜなら、H.E. Palmer の *English Through Actions* (1925) が示した 'Action Chain' とあまり相異ないからである。Oral Approach の短所をうめる一次的な効果はあったと考える向きもあるが、筆者は高くは評価できない。

Asher との類似性があるが、一段上を行くのが、「動作すること」、「協力すること」、「生徒に生産させること」を総合的に行う、Dick Via (1972) (1976), walker (1976) などに代表される「劇」を利用した英語学習法である。Dick Via の指導の成果は、1976年発行の *English in Three Acts* にまとめられているが、彼の指導では、学生達は台本作りから、舞台の設置、上映ま

で行うのである。W.M.Rivers (1972) などの主張する 'Communicative Competence' 助長のためには、教室内での pseudo-communication から本来の communication への移行が必要で、それに近づける一助として、role play を中心に据えている点でも十分効果のあるものであろう。近年は fieldwork を取り入れる指導を行っているが、これは、その前の段階の指導法である。

Scholz (1977) が第9回の The Control States Conference on the Teaching of Foreign Languages (1977, Columbus) の成果として報告しているように、学生達の多様性に対処する指導を工夫する必要があるわけで、その点からも English through Drama は期待の持てる方法であろう。

Gettegno (1972) は Non-verbal communication による言語指導を体系化して、The Silent Way の名称で発表し、demonstration を行い、Earl Stevick の賞賛を得ているが、なぜ Non-verbal なのかという疑問を筆者は捨てきれない。Pattern Practice の中に見るような、ある種の parrot-like-repetition の反動と見れば発想は納得できなくもない。

5. 1970年代中頃までの変化は何か?

Oral Approach 全盛の頃から 1970 年中頃、又は末までの傾向は、次のように変化したと言えるであろう。

① Teacher -Centered Teaching → Student- Centered Learning

② Structure-Oriented Teaching → Situation- Oriented Learning

この①②は、刺激→反応といった習慣形成教育としての Behaviorism から、発見学習、受容学習としての Cognitive Psychology への移行へ、又は学習者を中心とした Humanistic Psychology への移行とも考えられよう。

6. 1980年代の教授法は何か

この10年の話題は、やはり、Lozanov Method であり (Magnan 1979 が示すように)、Richard Curran (1976) に代表されるような Community

Language Learning (Keith JohnsonはCommunicative Language Teachingと呼んでいる)であり、Gattegno (1972)のThe Silent Wayであり、Terrell (1982,1896)とKrashen&Terrell (1988)に見られるThe Natural Approachということになる。

所謂、「認知」の教授法の時代ということになる。この出発点は、やはり、Krashenの第2言語習得理論としての核を為す5つの仮説である。第一仮説のThe acquisition learning hypothesisはsubconsciousレベルの言語認知という点でLozanov Methodと繋がり、第二仮説のThe natural order hypothesisは「文法構造の習得には人類の普遍的な類似性がある」とする点で変形生成文法との共通性を持ち、第三仮説のThe monitor hypothesisは「acquisitionによって内在化された知識は発話を促し、「流暢さ」もacquisitionによって得られる」とする点でLozanovと同じである。第四仮説のThe input hypothesisは教育者にとっては自明の理であるが、「発話行為における流暢さはinputできない」とする意見には必ずしも賛同できない。第五仮説はThe affective filter hypothesisと呼ばれるものであるが、学習の障害となるものをフィルターに例えているが、取り立てて珍しいものは無い。

Lazanov氏は現在ブルガリア国立リフィア大学サジェストロジー（暗示学）人間性開発研究所長であるが、生理学、精神療法などの実験（臨床）の後、外国語の記憶力の実験を行い、成人で1日に1,000 words以上の習得をさせている。彼の方法はsuggestionとpedagogyを合成して“Suggestopedia”と呼ばれている。

この方法は、①不安や緊張のない状態で集中力を高め、楽しく学ぶ。②学習者の全過程を通じて学習者の潜在意識を活用する。③学習者の認知面も含めて潜在能力を開発する指導の三原則にしている。

Community Language LearningについてはCurran氏の共同研究者でもあるPaul La Forge氏の日本（名古屋、南山大学）での研究や実験授業もあり、氏が長期滞在しているので、詳細はそちらの報告に譲ることにする。

The Natural Approachは19世紀後半のGauinやBerlitzの方法を総称したNatural Methodを連想し、その再来を考えると誤りである。Terrell (1977)では3つのprincipleを提案していた。それは(1) the classroom should be devoted primarily to activities which aim at faster acquisition; (2) the instruction should not correct student speech errors directly; (3) the students should be allowed to respond in either the target language, their native language, or a mixture of the two. の三つであり、更にTerrell氏の経験からthe most important principle is that acquisition activities should be provided in the class.を加えていた。Terrell (1982)は、上記の仮説を確認して教室でのNAのimplementationのための教術を加えている。Natural Approachの‘Natural’とは学生達をNaturalな状態で指導しようという意味での用語であり、CurranやLazanovと根底に於いて共通しているものである。

Terrell (1982)は、500語程度のsingle-word answerで答えられるものから始め、出来なければMonitorの役割を果たすのでもよい。質問文はIs this woman standing or sitting?とか、Is this car red or green?と言ったもので、naturalなenvironmentの中で行うべきであるとしている。

Terrell (1986)では、acquisitionとはthe process which leads to the ability to understand and produce that form correctly in a communicative context.だとし、その‘form’は、mono-morphemic (By tree), poly-morphemic (例running), or grammatical などとしている。Listening comprehension skillsを先ず行い、それからspeaking skillsへ移行するとしていて、この点ではH.E.Palmerの方法から発展していないが、Postovskyとは共通するものがある。Terrell (1986)の言う‘binding’とは‘cognitive’なprocessと‘affective mental process’のlinkingを指しており、これが重要だとしている。

Krashen&Terrell (1988)は従来のKrashenの言語習得に関する5つの仮説とTerrellの考えを統合したものである。

Reference :

Transition from Audio-lingual Approach to Communicative English Teaching
Theory in the Last Quarter of the 20th Century

1945 : Fries,C.C., *Teaching and Learning English as a Foreign Language*.

1957 : Fries,C.C.,On the Oral Approach (lectured)

1961 : Fries,C.C., *Foundations for English Teaching*.

1965 : [Chomsky,N., *Aspect of the Theory of Syntax*. M.I.T.Press]

1966 : James Asher , The Learning Strategy of the Total physical Response
: A Review. *M.L.J.*, vol.50/no.2, pp79-84.

1969 : James Asher ,The Total Physical Response Approach to Second
Language Learning, *M.L.J.*, vol.53, no.1pp.3-17.

1970 [Leon A.Jakobovits, *Foreign Language Learning : a Psycholinguistic
Analysis of the Issues*, Newbury House.]

1971 : Philip C.Hauptman, A structural Approach vs. a Situational Approach to
Foreign Language Teaching, *Language Learning*, vol.21, no.2.

W.R.Lee, Ten years of the Teaching of English as a Foreign Language,
E.L.T.J.,vol.4,pp.3-13

L.G.Kelly, English as a Second Language : a Historical Sketch,
*E.L.T.J.*vol.1,pp.120-133.

1972 : A.V.P.Elliott, The End of an Epock,*E.L.T.J.*,vol.2,pp.216-224.

Richars Via, English Through Drama, *English Teaching Forum*, vol.x, July-
August,pp.3-7.

Galeb Gattegno, *Teaching Foreign Language in Schools-The Silent Way*,
Educational Solutions, New York.

Wilga M.Rivers, *Speaking in Many Tongues*, Newbury House.

1974 : James J.Asher, Learning a Second Language Command, *M.L.J.*,vol.58nos.1-

2, pp.24-32.

Earl W.Stevick, Language Instruction Must Do an Aboutface, *M.L.J.*,
vol.58, no.8, pp.371-384

Valerian Postovsky, *Effect of Delay in Oral Practice at the Beginning
of Second Language Learning* (1970, Ph.d.dissertation,
U.C.L.A.), *M.L.J.*, vol.58, nos.5-6, pp.229-239.

James w.Ney, Contradictions in Theoretical Approaches to the Teaching
of Foreign Languages, *M.L.J.*, vol.58, no.4. pp.197-200.

Leon A.Jakobovits, Transactional Engineering Analysis and Foreign
Language Teaching : A Reply to Ney. *M.L.J.* vol.58, no.4, pp.201-
203.

1975 : Varelion Postovsky, On Paradoxes in Foreign Language Teaching, *M.L.J.*,
vol.59, no.1, pp.18-21.

1976 : D.A.WILkins, *Notional Syllabuses*, Oxford University Press.

Clifford H.Prator, In Search of a Method, *English Teaching Forum*,
VOL.Xiv, no.1.

Richard Via, *English in Three Acts*, The University Press of Hawaii.

T.A.Walker, Language through Drama, *E.L.T.J.*, vol.31, no.2, pp.141-145

Renate A.Schulz, Many Learners, Many Styles, *M.L.J.*, vol.xLI, nos.5-6,
pp.259-262.

Charles A.Curran, *Counseling-Learning in Second Language Learning*,
Earl W.Stevick, *Memory, Meaning&Method*, Newbury House.

1977 : Tracy D.Terrell, A Natural Approach to Second Language Acquisitior and
Learning, *M.L.J.*, vol.XLI, no.7, pp.325-337.

Mark G. Goldin, Who wouldn't want to use the Natural Approach, op.cit.
pp.337-339.

1978 : W.Jane Bancroft, *The Lozanov Method and Its American Adaptation*,

M.L.J., vol.LXIT, pp.167-175.

1979 : Sally S.Magnan, Reduction and Error Correction for Communication Language Use : The Focus Approach, *M.L.J.*, volLXIII, no.7, pp.342-349.

1982 : T.D.Terrell, The Natural Approach to Language Teaching : An Update, *M.L.J.*, vol.66, summer, pp.121-132.

1986 : Tracy Terrell, Acquisition in Natural Approach : The Binding/Access Framework, *The Modern Language Journal*, vol.70, nov.3, pp.213-227.

1988 : Stephen D. Krashen, Tracy D. Terrell, *The Natural Approach*, Prentice Hall

(おおつか よしひろ)